

## 江南の山地文化を知りたい

大林太良<sup>※</sup>

### 一. 閩南の海岸と内陸

昨年（1992）の十二月に、私は中国の福建省南部に行く機会があった。これまで中国にはすでに10回くらい訪れていたが、福建は今回が初めてだった。ちょうどその直前、私は『正月の来た道』という本を出版した。この本は過去三十年間に、いろいろな機会に書いた東アジアの正月儀礼に関する論文を一冊にまとめ、全体としての脈絡をつけたものであった。また、その二年前に『東と西 海と山』という本を出し、日本内部の文化領域の問題を考えてみたことがあった。

だから今度の旅行では、この二冊で論じたことを背景にもって、福建の民俗を観察し、考えることができた。ある程度、文献によって問題の整理をしてから行ったことになるのである。廈門から莆田県にかけて、つまり福建省の南部から中部にかけての海岸部を駆け足でまわった1週間ばかりの旅行であったが、それでもいろいろなことに気がついた。

この地域に関して言えば、海岸の海民の文化とそのすぐ内陸の農民の文化が区別できるのではないか、というのが私の印象であった。つまり、莆田県の湄洲島（ここは媽祖が生まれたところである）や、惠安県の大岬や小岬といった漁村では、結婚式をあげると、妻はすぐ実家に帰り、子供が出来てから夫の家に移る「長住娘家」の俗がある。これは中国南部の少数民族のところが多い不落夫家の一環である。ただ、福建の漁村で面白いのは、それとともに「姐妹伴」あるいは「姉妹伴」、「契伴兄弟」あるいは「少年伴」と呼ばれる娘組や若者組が発達していることである。時々一緒に宿泊することがあり、私が以前調査した志摩の寝宿や寝屋の仲間と共通するものを感じた。

ところが、このような習俗はすぐ内陸になるともうない。その代わり、そこではかつては新年に石合戦がおこなわれていたり、八月十五夜には里芋を食べる習俗があったし、水田を耕すのに水牛がさかんに使われていた。漁村とは違う生活様式が内陸には展開していた。

私が、今まで考えていた日本の沿岸文化における若者宿、若者組、また東アジアの稲作文化における石合戦や儀礼食としての里芋という見通しが、福建のこの部分である程度裏付けられたと思ひ、大変嬉しかった。勿論、短い、駆け足の調査であるし、地域も限られている。もっと本格的な調査が必要なことはいうまでもない。

今度の福建の旅行は、海岸部の旅であった。山地には行ってない。山地についての情報はあま

---

※東京女子大学現代文化学部教授・東京大学名誉教授

りもっていないが、それでも私は福建から浙江にかけての山地は、色々面白い問題をはらんでいるのではないかという予想を持っている。というのは、山越の問題に係わってくる可能性があるからだ。

## 二. 山越とその子孫

前から私が気にしていながら、まだ手をつけていないでいる問題に山越がある。後漢の末から文献に登場し、三国時代には盛んに反乱と鎮圧の記事が史書に現れ、隋や唐になると文献にまれにしかでなくなり、宋以後は記録にのらなくなるあの山越である。大体、今の江蘇、浙江、安徽の三省、つまりかつての呉や越の地を中心に住んでいた住民である。

この山越は越人の子孫だが険しい山に住み貢租を納めないものだ、と胡三省が『資治通鑑』漢紀の注に記しているが、恐らくそうであろう。私は、山越が文献に現れたのは後漢の終わりであっても、呉や越が争っていた時代、あるいはそれ以前から、山越の先祖、少なくともその一部はこの地域の山地に住んでいたのではないかと想像している。

呉や越の住民というと、我々はとかく海の民、あるいは平地の水稲栽培民という目で見がちである。それは間違いではない。しかし、それで全部なのではない。山地の住民も考える必要があるのだ。かつて、エーバーハルトは『古代中国の地方文化』で“越文化”を論じた時、その構成要素として、焼畑耕作文化である“ヤオ文化”と水稲耕作文化である“タイ文化”との双方が含まれていると考えた。“タイ文化”と“ヤオ文化”というレッテルの当否は別として、越の文化のなかに、水稲耕作文化的要素と焼畑耕作文化的要素の双方があるという想定自体は、私はあたっていると思っている。

このように考えると、問題になるのは山越あるいはその前身にあたる呉越の山地の文化が、日本の山地文化と何か関係がないだろうか、ということである。ことに中部日本以西の照葉樹林文化は呉越の地と生態的にも重なっている。従って、西日本の山人の文化と山越の文化とは、一度本格的に比較研究してみると面白いのではないだろうか？

残念ながら、今までそのような問題意識で研究が行われたということを私は聞いていない。これはある意味でもっともである。近年、中国で刊行された数多くの呉越ないし百越についての研究を見てもわかるように、山越については、その生活様式は史書にはほとんど記録されていないのである。椎髻をしているとか（『後漢書』度尚伝）、「山は銅鉄を出し、自ら甲兵を鑄る」（『三国志』諸葛恪伝）というように断片的に面白い記事は少しはあるもの、史書から得られる情報は僅かである。

これを補ってくれるのは、志怪小説や随筆類であって、例えば、恐らく山神の一種と思われる山都や山獠と呼ばれる山の怪物などの記述はいろいろな書物に出てくるが、日本の山男などに比較できることは、すでに竹村卓二なども指摘したことである。中国では、この表象はもともと山越の文化に属していたのではないかと私は思っている。誰か志怪小説や随筆類それに地方誌を

調べ、かつての山越の領域にかかわる俗信や奇譚をシステマティックに研究する奇人な人はいないだろうか？

しかし、それとともに必要なのは、近現代におけるこの地域の山村の民俗の研究にある。もちろん、私はそれに過大な期待をもっていない。中国を訪れるたびに痛感することは、中国高文化のもつ恐るべき同化力ないし、均一化の力である。だから、江南の山村にどれだけ山越の遺習が残っているかはあまり期待できない。柳田国男が、戦前の山村調査の結果、調査した五十数村のうち四十数村中では、たんに奥まった農村にすぎなかったと述べた。同じようなことが江南の山村についても言えるのかも知れない。それでも、江南の山村の民俗には、他とは違う特徴はないか、またそのうち山越にさかのぼるようなものはないか、を調べてみることは必要である。

照葉樹林文化ということが論ぜられるようになってから二十年以上たっている。西日本の焼畑耕作とその文化を雲南その他の山地文化の事例と比較する試みは、佐々木高明などによってさかに行われた。それでも山越は軽視され、また江南山村の民俗への関心も高いとはいえない。私は照葉樹林文化論は考え直してみる時期に来たと思っている。その見直しの作業において、重要な役割を演ずる可能性をもっているのが、山越であり、また江南山村の民俗なのではないだろうか？

私は『正月の来た道』をまとめてみて、かつて東アジアの焼畑耕作民文化複合に属すると思っていたいくつかの特徴が、実は水稻耕作文化複合に属する蓋然性のほうが高いと思うようになった。それではどんな要素が焼畑耕作文化的なものとして残るのであろうか？こういう問題関心からしても、江南の山村民俗は重要なのである。

東アジアの民俗の比較研究には、いろいろな立場がありうる。日本から中国や朝鮮を見る立場もあれば、中国あるいは朝鮮から日本を見る立場もある。あるいは日本から中国を見、その目でまた日本を見直すという立場もあるだろう。いずれにしても、本格的な比較研究はまだ始まったばかりである。これからどんな面白いことが出てくるか、楽しみである。

その際の切り口の一つとして、生態学的に条件づけられ、また日本にも対応するようなものをもつ文化複合ないし生活様式を選ぶのは、やはり有効性をもっていると私は考えている。